

「……随分と騒がしいな。一体どうしたんだ。」

今日は珍しく弓月まで着いてきた目付け役の黒猫と校門前で別れ、実に数日振りに所属する教室にひとり足を踏み入れると、級中の生徒たちがとある生徒を中心にしてわいのわいのと騒いでいる真っ最中だった。

基本的に騒々しいのを好まない自分は其の不快感からほんの僅かに眉宇を寄せ、喧騒から離れて苦笑している少数の同級生の内一人を捕まえて問い質した。

自分よりひとつばかり年上らしい彼は自分を見て目を数度瞬かせ、珍しい男が来た、と態とらしく驚いてみせた。

「何だ葛葉、もう調子はいいいのか」

にやりと口元を歪ませる彼にちらりと視線を流し、お陰さまで、と軽く流す。

学校側からは病弱な為欠席しがちであるという言い分を通してもらってはいるが、其れはあくまでも建前であつて、実際の事情は全く別のところにあるということが同級の連中の知るところとなつて久しかった。

あまり好ましくは無いことだが、致し方ないだろう。同級全員では無いにせよ、調査途中の街中ですれ違つことも多々あつたのだから。

しかし調査に赴いている自分と街中ですれ違つていうことは、当然其の相手も其の時間帯に学校には行っていないということに他ならない。そのことに対する疚しさ故か、目が合った瞬間拳動に乱れが生じた相手とは違い、自分は何ら後ろ指を差されるような行為をしているわけではなく。また、たかが同級の相手と層間の街中で出くわしたからというだけで、これといって反応してやらねばならぬ必要性も見出せなかつたので、結局其の日も普段通りの堂々とした態度で、聞き込みを続けたのだが。

はあ、と小さく溜息をついた。

……しかしそんな堂々とした自分の態度が、却つて彼らの間で何らかの憶測を呼んだらしく。

翌日になって登校した際、編入してから此の方ずつと遠巻きに自分を眺めているだけだった同級の連中が、やけに馴れ馴れしい態度で自分の周りを固め。素人相手ではあるが数が数であるがゆえ、油断はならぬと些か警戒を以つて対峙した自分に向かって『葛葉、お前がそんな話の判る奴だったとは』だの『大丈夫、先生には密告しない』だの『隅には置けないな』だのと次々に話しかけて来たのだ。

一体こいつらはどうしてしまつたんだろうと、あまり他の人間に興味を持たない性質であるこの自分も、彼らの豹変した態度に流石に唖然としてしまつた。

しかしよくよく彼らの話を聞いてみれば、どうやら彼らの中で自分は病弱を口実に学校をサポートジユシ、実際は複数の女学生相手にあれやこれやと勤しんでいる、ということになっているらしいことが判明した。

何故そつたぬ。

口々に述べられていく其れらの下りを聞いている途中から、彼らの遅しすぎる想像力に些かどころでなく頭痛を覚えたが、嗚呼そういえば自分はあの後幾人かの女学生相手に聞き込みを続けたんだっけ、もしや其れが原因なのだろうか、と思い返し。しかし同時に、たかがそれだけのことで、何処をどうしたら其処まで突き抜けた解釈が成り立つんだと、己の感覚と世間の其れとの隔たりに著しい疲労感を覚えた。

だが、只でさえ多忙な毎日を過ごしている我が身だ。其の傍ら、いくら誤解を受けているとはいへ学校でまで自らすすんで面倒事に巻き込まれる気にはなれなかつたのが正直なところでもあり。念の爲目付けの黒猫とも相談した上で、都合のいいことや実害の無いことに限っては彼らの思い込みを否定しないで放置しておくことにしたのが、数ヶ月前のことだ。

当時のことを思い出しながら、目の前に立つ彼の顔を眺めた。

無論、この同級生も其れらの事情を踏まえた上で、態とこいついた会話を吹っかけてきているといつことになる。自分に向ける視線に揶揄する光が含まれていることが、何よりの証拠だった。

見当外れの心えに不快感が募った。

「質問に答えていない。何があつたといつんだ」

「……短気だねえ君。友達無くすよ」

のびりくらりとほぐらかされることに少々つまびりし、こいつを捕まえたのは失敗だったかと彼に

背を向け、そのまま離れた位置に居る他の同級生の元へと赴こうとすれば、慌ててマントの端を掴まれた。

離せと払いながら振り向けば、全く冗談の分らない奴だとほやかれた。

「ならばさつと一言え」

生憎、其の程度のぼやきなんて常口頃から聞き慣れている。

大して怒りも感じないまま素っ気無く返せば、彼はやれやれと溜息を吐きながら漸く自分の望む答えを返して来た。

大事件つてわけでもないんだ。

「理乙吉組全体を巻き込んだ大木の恋の行方が、つい先日敢え無く終わりを告げてしまったのさ」

「……恋」

夢多き乙女たちが集つ女学校なら兎も角、むさ苦しい男ばかりが集まるこの三月に於いてまで、そんな話で級全体が盛り上がることもあるだなんて。

同じ年頃の同性といえ、自分と似たり寄つたりな境遇にある里の者たちしか知らなかった所為もあり、大っぴらな彼らの反応には正直言つて驚いた。

確認するよつにぼつりと呟いた自分の言葉の裏に隠された意味など知りようも無い彼は大きく頷き、肯定を示した。

「そつ、恋だ。」

葛葉はここ数日連続して欠席していたから、知らないだろう」

尤も、来ていたところで話に参加したかどうかは分からないけどね。

普段から群れたり、噂話に興じたりといったことを滅多にしない自身の行動を、笑いながら揶揄された。自分でも頷くところがあったので否定はせず、小さく鼻を鳴らして認めるに止め、後は無言で所定の位置にマントを掛け、自分の席に向かって歩を進めた。話しかけた彼は何を思ったのか、自分の後について歩きながら問われもしないのに事の詳細を訥々と口にし始めた。

曰く、大木は念願叶って我が五月に入学を果たした頃合より、時折本郷の目抜き通りですれ違ふお下げ姿の女学生に心を奪われてしまっていたこと。

即ち出会いし折よりかれこれ二年は優に経っているわけではあるが、男女七歳にして云々と謳われて久しくある通り、ここ数年異性に話しかけた経験など無に等しかった大木には、自ら進んで彼女に声をかけるなど到底不可能であり、結果、何処その恋物語よろしく遠くから彼女を慕い見詰めることしか出来なかつたこと。

夢る想いに随分と思ひ悩む彼の姿を見兼ねた彼の友人たちが、我々にとつても他人事では無いと騒ぎ出したこと。

しかし、所詮同じ穴の貉といつてもいい彼らには、女学生の知り合いなど居よう筈も無く、万事お手上げの状態であつたこと。

「妹や姉を持つ者すら居なかつたといつのか、」

こいつも暇な奴だな、と呆れ半分に彼の話を聞きながら、途中で疑問に思ったことを口に出した。

「居たことには居たけれど、女学校にまで上げてやれる経済力を持った親なんて、うちに通つような生徒には早々居やしないよ、」

お世辞にもブルジョワジーとは言えない出身の連中ばかりだからね。僕も含めて。

彼は肩を竦め、至極あつさりと言いつつ放った。

「……成る程」

彼の話に適当に相槌を打ちながら、手にした鞆から教科書や筆記帳、鉛筆や辞書を取り出していく。一見相手を無視した非礼な行動に見えるながらも、しかし自分が話をきちんと聞いていることを同級の者なら誰でも知っているので、彼もまたそんな態度を見せる自分にさして気を悪くした素振りも見せず、前の空いた席に腰掛けて更に続けた。

まあ、そんな訳で。

「誰もが諦めかけていた。ところがふた月ほど前、とある活動写真館の前で学友と立ち話をしている彼女の話を小耳に挟んだ奴が居た」

机の一角に全ての教材を重ねて整え、授業の準備が全て整った時点で初めて、彼の方へ向き直る。皆と同じように机の上に片肘を突き、話の先を促した。

「其の内容は、」

「うら若き乙女が好む類の、恋の話について」

「……へえ」

自分にとっては大して興味の引かない話題ではあるが、件の彼にとっては違ったのだらう。

「それで、其の場で失恋か」

そう問いかけると彼は頭を振った。

「いや、その端折るなよ。……其の時の彼女には未だ、これといって定まった相手が居なかつた。ただ、好みてやつを口にしていただけでね」

「ただらと続く要領を得ない話を聞きながら、もっと巧く話せないものだろうか、日々上司たる彼の人を前に報告の腕を磨いている身としての思いが脳裏を過ぎる。だが目の前に居る彼と自分とは上司と部下ではなく、単なる同級に過ぎないのだから其れは過ぎた要求だろうとも思い直し、始業までの間と定めて付き合つてやることにした。どうせ他に何もすることとて無いのだし。」

「……どんな好み」
明らかに興味無さ気な溜息交じりの問い掛けに怯む事無く、彼は決まっているだろうとばかりに答えた。

「『一高の殿方がいい』」

「成る程ね」

何の意外性も無い答えに鼻を鳴らした。

「ありがちと言えはありがちだ。」

「全国区から選りすぐられた彼らは、学力に於いても、また将来の有望性に於いてもまこと頼もしい存在だ。其の評判は学生の間のみで留まらず、例えば銀座にある資生堂であるとか二越であるとか、普通ならば制服を身につけた学生が足を一歩でも踏み入れようものなら一斉に眉を顰められるような場所であっても、学帽や襟元に光る徽章が若し柏の其れであるならば、途端に周囲の見る目が変わり、丁重に扱われるのだと聞いている。」

ただ、自分からしてみれば、擦り切れたマントに染みだらけの皺々の襯衣、何時洗濯したのか分からない、醤油染めのよつな手拭を腰に引つ掛け、歩く度に林菌の下駄ががたがたとやかましい一高生の姿など見るに耐えないというのが正直なところだし、其れはまた、自分の上司と目付けも同意するところであつた。

全く、世間と言つものはそんな不潔な野郎どもの一体何処が良いのだらう。

首を傾げずには居れないが、しかしそういった事実が現実存在するのだから仕方が無い。

「それで、……大木は自分が一高生でないから駄目だと、そう嘆いているわけか」

「嗚呼、そつだつたら未だ傷は浅かつたんだが」

何だつまらない、と思ひながら口にすれば、途端に言葉を濁した彼へ再び視線を向ける。彼はどう言つたものか少々悩んだのか、二、三口を開閉した後葛葉と呼びかけてきた。

「何だ」

「葛葉は、……『偽イチ』って知つてるかい、」

躊躇いがちに発せられた単語に、目を瞬いた。

知つていても何も、つい先日上司たる彼の人と共に本郷のカフェーに足を伸ばした際に伺つたばかりだ。

即座に頷き、小さな卓子に向かい合わせに座り、苦笑を浮かべながら珈琲を傾げる彼の人と間近に交わした会話を思い出しつつ、其の特徴を訥々と述べ始める。

「……確か、『一高生と同じ待遇を手に入れたが為に、彼らと同じ衣装を身に纏い、彼らと同じよ

うに行動する偽者の一高生のこと』、か

「J名答」

手の中で丸めた筆記帳をぼん、と音を立てて叩きながら彼は答えた。

だが当たるところで嬉しくも無い上に、此の会話の流れで其の言葉が出されたことから読めてしまった失恋の原因とやうに、ひどく不快感を覚えた。

「……まさか、」

眉を寄せる自分に、彼は溜息混じりに其の予想を肯定してのけた。

「其のまさか、さ。大木と其の友人たちは愛しい彼女を手に入れるために、総出で柏の徽章や学ラ
ンを手に入れて、大木を見事、我が弓月生ではなく一高生として仕立て上げたって訳」

今度こそ呆れて大きな溜息を吐いた。

「……一体何を考えているんだ」

「全く以つて其の通り。一高には一步譲るが、我々が弓月だつてそうそう簡単に入学できるような
学校じゃない。其れなのに此の誇り高き制服を捨てて柏に走るとは言語道断」

手にした筆記帳で派手な音を立てて机を叩いた彼に落ち着けと手振り以示しながらも、其の不毛な
発想と行動に呆れ、溜息を吐けば同感だとはかりに力強く頷かれた。

今の今まで目の前の彼は大木に対し同情しているのかと思つていたのだが、実は真逆だったらしい。
道理で群れから離れていたわけだと思ひながら、自分が話しかけるまでの間殆ど表に出さない形で

憤慨していたのだと思われる彼の横顔を眺め、矢張り自分は未だ未だ人の感情を伺い知る能力に欠け

ている、と自首した。

件の大木の行動に対しては、実際には怒りというより先の展開が読めなかった其の頭の悪さに呆れ返っているのだが、自分の同意を得たと思ひ込んだらしい彼は矢継ぎ早に喋りだした。

「幾ら姿形を真似たって、『月生は』月生、一高生は一高生。滲み出る品格つてものが違つ。奴らは汗臭い寮歌そのままだが僕らはそつじやないんだ。どれ程頑張つてみたところで必ず襟襟が出る。……案の定、件の彼女と本郷でデエトしてる最中に他の一高生と出くわして、早々にばれてしまったと言つ次第よ。」

大きくなりがちな声を精一杯抑えながら教えられた状況に、其れは絶望的だなど頷いた。

「成る程ね。……そりゃあ振られて当然だ」

「騙された彼女の怒りは凄かつたらしいよ。其の場で張り手を喰らつたらしい。翌日から二日はかり、奴の片頬は彼女の手形で真っ赤になつてた」

自業自得だ、いい薬だよと締め括つた彼は自分に吐き出したことで漸く一息ついたのか、ふつと溜息を吐いた後、取り乱したな、失敬、と断つて笑つた。

氣にするな、と頭を振り、彼方へ目を向ける。

「莫迦な奴だな。……態々本郷でデエトなんぞしなくとも、他の場所へ行けば良かったのに」
本郷といえは連中のねぐらじゃないか。危険すぎるとは思わなかつたのか。

理解できないといった風で呟けば、彼は笑いながら答えた。

「ははは、葛葉は我が『月』きつての成績を誇っているくせに、相も変わらず世俗的な発想には疎い

んだな」

「悪かったな」

事案なので左程怒りも覚えない。そんな自分を前に、彼は笑みを浮かべたまま、なあに、それでこそ葛葉さ、と続けた。

「……さして小難しい理由なんて無いよ。『一高生なんだから、行きつけのカフェーくらいあるんでしよう。連れて行って』とのたもった彼女の願いを、拒否できなかっただけさ」

「つまり自爆か」

「そついうことだね」

何だ、と軽く鼻を鳴らし、これでこの会話は終了と教科書を開いた。

会話が終わつたというのに、一向に自らの席に戻ろうとしない彼の気配に訝しんでいると、彼はそんな自分の視線に構つ事無く、手にしたままの筆記帳を丸めたり伸ばしたりしながら何やら逡巡しているようだった。自分もまた黙して、彼が口を開くのをひたすら待つ。

やがて決心がついたのか。なあ、と話し掛けてきた其の口調には先程感じられた陽気さや威勢の良さが消え失せ、すっかり気弱な其れへと摩り替わってしまった。

今日はまた珍しく学生らしい話をする日だなと、場違いな思いを巡らせながら目を向けると、彼は自分と、随分と落ち込んでいる風の大木と其の取り巻きへと交互に目を向けながら、ひっそりと尋ねてきた。

「葛葉には、……いくら好いた相手のためとはいえ、其処までする気持ち分かるか」

自分に向けられるにしては、思いもよらない質問であつたことに少々驚いた。

一瞬間が空き、相手が真剣に投げかけた質問であるかどうかを確かめた上で、しかしどつ言つたものかとの中にある感情を整理しながら慎重に口を開く。

「……さてね、判らないでもないけれど」

「……けれど」

先を促す彼に視線を合わせ、はつきりと言いつつ放つた。

「いくら惚れた相手の気を引きたいが為とはいえ、」

小さく、鼻先で其の行為を笑いながら口にする。

「……俺ならそんなみつともない格好はしたくないね」

そつとも。全く以つて莫迦莫迦しい。……何故なら。

『自分』という存在を好いてもらえなければ、意味が無いじゃないか」

明確過ぎるほど明確な自分の答えを聞いた彼は、其れが随分と意外だつたのか。しばし啞然とした後、違くない、と声をたてて笑つた。

「いやあ、……それにしても、葛葉は意外と情熱的なんだなあ」

すつかり調子を取り戻したらしき彼が、心底意外そうに感心しながら述べた感想に、それでもないさと肩を竦めた。

其処で漸く、予鈴の鐘の音が校舎中に響き渡つた。

途端に彼は慌てて席を立ち、じゃあまた、と手を上げて自分の席へと戻つて行つた。件の大木を中

心とする一団もまた、慰めるように次々に大木の肩を叩き、各々の席に戻って行った。ざわめきが収まり、鼻の高い独逸人の教授が入室して来る姿を目で追い、号令と共に席を立ち、頭を下げる。

ああは言ったものの。……しかし、分らないでもないのだ。

教鞭を振るう教授の言葉に従い、開いた独逸語の教科書をほんやりと眺めながら、先程交わしたばかりの会話を反芻する。

《ライドウ》を襲名したばかりの、帝都へ出て間もない頃の自分であれば、好いた者の心を得たいがために自らの姿を偽る、などという行為に対して、ただ『愚かだな』という程度の感想しか抱かなかつただろう。

其れが今、こうして、これまで生きてきた中で初めて、他の誰かに本気で心を傾けるようになってからは、世界というものが如何に自らの思い通りにならないものなのか。かつての、傲慢ともいえるほどに自信に満ち溢れた自らを懐かしく思えるくらい、常に、何処かしら心に不安を抱えるようになってしまった。

年齢、身分、そして何より、其の性別。

指折り数え上げればきりが無いくらい前途多難に過ぎる恋。

まさか選りにも選つて此の自分が、同性を好きになることなど考えたことすら無かつた。

どうすれば、彼の人に《そついった》対象として見て貰えるか。どうすれば、其の心を得られるか。自分でも情け無いことだと思つが、皆目見当がつかない。

誰にも気取られぬよう、ひっそりと切なさのこもつた溜息を吐く。

しかし『《一》』すれば相手の心を得られる』ということを知り得るといふことは、果たして運が良
いことなのか、悪いことなのか。少なくとも彼処で塞いでいる大木という男にとつては、ある種悪魔
の囁きにも似た、甘美な魅力に満ちたものだったのだらう。

そして、彼は、其の誘惑に打ち克つことが出来なかつた。

其処まで考えて、ふと自嘲の笑みが浮かんだ。

何をどうすれば良いのか。何も分からずただ立ち尽くしているだけの自分と比べて、より明確な選
択肢を得ることが出来た彼が、ほんの少しではあるが羨ましく思つたのだ。

しかし即座に、そんな気弱な事を考えてしまった己を叱咤した。

全く、らしくもない。当代【ライドウ】たる此の俺が何たることか。分からないなら分からない
りに、どうにかすれば良いだけじゃないか。どうせ型破りなものになることは、端から分かりきつて
いる恋なのだから。

定刻になり、終業の鐘が校内に響いた。

教室中がざわめく中、ひとり素早く荷物をまとめ、寄り道の誘いを断つて校舎を出た。

今日は色々と考えさせられる日だったと感慨深く思いながら校門へ向かつていると、門扉の影から
僅かに覗くキャメル色の背広を着た細い後姿が目に入った。

驚愕のあまり、歩んでいた足が一瞬止まつた。

首の辺りに何やら黒いものが巻きついているが、あの見覚えのある長身は間違いない。彼だ。

何事があったのだろうか、しかしそれにしても呼び出しが無かった、などと考えながら慌てて駆け寄れば、近付くにつれて彼の方から煙草の煙と思しきものが細くたなびいているのが見えた。

呑気に煙草をふかしている。どうやら緊急の用件があったわけではないらしい。

幾分安堵して速めていた歩を緩め、ゆっくりと彼の元へと向かえば、自分の気配を察したのか。彼は門扉にもたれた体勢のままこちらに顔を向け、よよと片手を上げた。

「お疲れさん」

「一体どうなすつたのですか、態々このようなところまで足をお運びになられるなんて」

昏間に出歩くことなど滅多に無い彼が、幾つか電車を乗り継いで徒歩数分、といった距離にある弓月に出向いてきたことに驚きを隠しきれないまま、問いかける。

「なアに、ちよつとした野暮用つてと」

そんな自分の様子に切羽詰つたものを感じたのか。なんてこたない、という風に片手にぶら下げた袋を示し、安心させるように彼は微笑んだ。そしてそのまま、この付近に店を構える老舗の和菓子屋の屋号が記された其れを嬉しそつに眺めながら続ける。

「急にこいつを食いたくなつてな。時間も時間だったし、偶には一緒に帰るのもいいかなと思つて待たせてもらつたわけよ」

途中で「ウトとも出くわしてさ、丁度良いから一緒に待つてたんだ。

「ちよいとはかり首周りが寒かつたので、こつしてね。いやあ、暖かいなあ」ウトは

こつなつてしまつまで彼らの間で一体如何なることがあつたのか。すっかり抵抗する氣力を無くしているらしい黒猫は、だらりと脱力した身体を彼の首周りに巻きつけていた。そんな黒猫の臀部を空いた方の手で撫で擦り、彼は笑つた。

「……何時も身につけていらつしやる襟巻きは如何為されたのです、」

「いやアそれが。社の窓から見てる限りじゃ外は随分と暖かそつだつたから、いらなかなと思つて、置いてきぢやつたんだよね」

そのまま直ぐ傍にある黒猫の毛皮に顎をこすりつけて上機嫌な彼を、目付けはゆるりと其の頭を上げ、幾分呆れ氣味に眺めていた。其の様子を目にし、自分は今、彼に対し確実に目付けと同じ思いを抱いているだろつことを確信した。

全く、幾つなんだ此の人は。

腹の底から段々とこみ上げてくる可笑しさを堪えきれず、帽子の鍔を僅かに引き下げて口元に浮かぶ笑みを隠した。暫しの間、和んだ空氣が其の場に流れる。

笑いが漸く治まり、一息吐いて落ち着きを取り戻した後、口を開こうとした自分の背後から聞き覚えのある声が幾つか聞こえてきた。どうやら同級の連中が通りがかつたらしい。

途端に浮かべていた笑みをかき消し、彼らへ向けてじろりと一瞥を向ける。しかしそんな自分の背後で彼が黒猫を首に巻きつけたまま背伸びをして、ひらひらと手を振る氣配がした。

……台無しである。

「何してるんですか」

幾分慌て気味に背後を振り向き、周囲に散らばる他の者に聞こえない程度の小さな声で叱咤するが、彼は全く悪びれる素振りも見せず。寧ろ更に愛想を振りまき続けた。

「あれ、お前の同級生だろ。ここはひとつ保護者として挨拶のひとつでも……」

「やめてください、みっともない」

しかし背広の裾を引いて止めようとする自分のことなど構いもせず、校門を通り過ぎる学生たちに次から次へとひらひらと手を振り、彼はお疲れーと声をかけ続けた。

狼狽し、彼の服に手をかけたままちらりと背後の様子を窺えば、案の定というか、同級の連中は一瞬戸惑った表情を浮かべてはいたが、即座に気を取り直して彼の挨拶に心えて手を振り、自分と彼へ向けて笑いながら口々に挨拶を交わしていった。

……嗚呼、なんてことだ。

これは確実に質問責めに遭ってしまつて、口下手な自分にとつて何より忌避すべき事態が近い将来に於いてかなりの高確率で実現しそうな気配を存分に察してしまい、内心頭を抱えた。

しかし悲しいかな、出会つてから此の方、只の一度も口で勝てた試しなど無い彼を、今此の場で説き伏せることなど到底不可能だった。努力したところで時間の無駄にしかならないことは既に判りきつている。ならばどうするか。　実力行使、これしか手はない。

結論が出たからには、これ以上の犠牲が出ないうちに早々と行動に出ることにした。

問答無用とはかりに彼の細い上腕をがしと引っ掴み、帰宅、或いは帰寮する学生でこつた返し始めた校門から引き離す。

加えられる圧力に負けじと他の生徒たちに手を振り続けてはいるが、矢張り多少はやりにくいのか。小さな声でおいおい随分と乱暴じゃないか痛いつては服が伸びる、と抗議し続ける彼を無視し、そのままぐいぐいと路地裏まで引つ張って行った。

辿り着いた其処に人氣の無いことを確認した上で漸く彼の腕を放し、恥をかかされた恨みも込めて睨みつけるが、しかし彼はそんな自分の目線など痛くも痒くも無いらしく。ただ掴まれていた箇所をさすりながらぶつぶつと文句を呟いていた。

「んもう、乱暴なんだからライドウちゃんてば、そんなんじゃ友達無くしちゃつよ、」

「心配は無用です。寧ろ先程のよつなことをされる方がこちらとしては堪ったものじゃありません。未だ残る羞恥心から僅かに耳を染め、肩を怒らせて口早に抗議した自分を、彼は何故怒っているのか分からないといった風に見詰め、目を瞬かせた。

「え、何か不味かつたかな。彼処で笑いながら手を振り返してくれたの、お前の同級生だろう、」

「ええそうです。だからこそこうしてお願ひしているんです」

其処まで言つたところで、小競り合いを続ける自分たちの姿を彼の首元から目を細めて面白そうに眺めている黒猫の顔が目に入った。

「ゴウトもゴウトだ、何故止めてくれなかつたんだ、」

少なくともずれた反応ばかりを返し続ける彼よりは、未だ話が通じそうな目付けに矛先を向ける。

ニヤ（別に大したことでもないだろう。気にし過ぎだ。）

しかし目付けはそんな自分の詰りを一笑した拳句、呑気な大欠伸のおまけまでつけてきた。

……他人事だと思つて。

腹立たしく思いながらも止むを得ず、元凶ともいえる彼の方を再び見遣れば、彼もまた先程の目付けと同じような自つきで自分を見ていたことに気がついた。

揃いも揃つて、何だといふんだ。

「何が可笑しいんです、」

「いいや、別に」

むつとした顔で問いかければ、彼はにやにやと笑い、次いでこう続けた。

「ライドウちゃんも、普通に学校での自分の印象が気になるんだって思い至つてさ、」

いやぁこれはお兄さんが悪かった。保護者に校門まで迎えに来られたりしたら、そりゃア格好つかないよなぁ。

一人勝手なことを口走りながらうんうんと頷いて納得し。

「御免御免、この通り。な、」

彼はそう言つて両の手の平を合わせ、自分を拝み始めた。

首に猫を巻いたまま平謝りし続けるという彼の、随分と間の抜けた姿を眺めているうち、何だか自分ばかりが怒っている此の状況が莫迦莫迦しくなり。つい先程まで身体に満ちていた箭の力が、徐々に抜け落ちていくのを感じた。

「いいですよ、もう。……過ぎたことです」

すつかり脱力しきつた声でそう述べれば、頭を下げたままの彼が上目遣いに様子を窺ってきた。

「但し。……今後似たような事を仕出かしたときは、許しませんからね」

しかしこれだけは譲れないとばかりにそう確り釘を刺すと、彼は肩を竦めながらはいはいと呟き。

「おっかないんだからもう。わっかりましたよーだ」

そう言つて何時ものように態とらしく拗ねてみせた。

態とらしい。

そう見抜いた筈なのに、其の時の彼の横顔が、普段の其れと比べてなんだか妙に寂しそうに見えた。

しまった、言い過ぎた。

少々慌てながらも、しかし冷静になつて思い返してみれば、そもそも彼は、目的の菓子を購入した後直ぐ様帰社しても良かったのだ。だが実際には、彼は、ほんの親切心からこうして態々『月まで自分を迎えに足を運んで来てくれた訳で、其れを考えると、幾ら恥をかかされたからとはいえ、先程彼にぶつけた自分の発言はあまりにも自分のことにしか考えの及ばない、子供っぽいものであつたように感じられた。

寧ろ其の行為の方が恥ではないか。

しかしそう後悔してみたところで、既に口に出してしまったことを無しにすることは出来ない。ならば自分に出来ることといえば精々、少しでも其れを補填できる言葉を付け加えることだけだ。

乏しい語彙の中から、使えそうなものを選び取る。

「……でも、共に帰るくらいなら一向に構いませんので」

悩みぬいた拳句、そんな言葉しか浮かんでこない自分に更に恥し入り、俯き、学帽を引き下げて顔

を隠しながらそう付け足した。

そんな自分の科白からやや間を空けてから、彼の静かに笑った音が聞こえた。

腕を伸ばされ、学帽越しに頭を撫でられる。其れと同時にふわりと辺りに漂う煙草と、香草の香り。

慣れた、慣れてしまった彼の匂い。

また人の子供扱いする、と不満を抱きながらも嬉しさに頬を染めながら頭を上げれば、彼は素早く学帽の上にあつた手を滑らし、首筋ごと頭を抱え、引き寄せた頬に派手な音を立てて唇を落した。

今度こそ首まで真つ赤になって怒鳴りつけようとする自分の腕を彼はひらりと躲し、あははは、と朗らかに笑つた。

「かわいいなあ、ライドウ。お前、もっとそつやつて歳相応にやっつけてほしいよ」

あまりのことに、暫し無言で口が開閉する。

「……貴方つて人は、」

抑捺われた怒りから身体を震わせ、信じられない、前言撤回です、もつ二度と貴方と共に下校するのは御免です、と立て続けに口走りながら漸く反心した己が身体を動かし、マントを翻して彼に背を向ける。そして足早に駅方面へと歩を進めれば、其れを見た彼が慌てて笑いを引っ込め、後を追ってくる気配がした。

「何だよ、そんなに怒るなつて。ちよつとした冗談だつてば」

「冗談であんなことをされては困りますと、何度も申し上げているでしょう」

誰かに見られたらどつなさるおつもりだったんですか。考え無しな行動も程々にして下さい。

「あ、程々にしたら許してくれるんだ」

「……………」

へらへらと返される、一向に懲りていならしい彼の科白に一瞬足が止まり。しかし直ぐ様 先程よりも尚速度を上げた。

其れからはもう何を言われても取り合つ事無く、真つ直ぐに駅へと歩み続ける自分に黒猫を肩の上に乗せながらついて歩く彼は何を思ったか、今度は黒猫に向かつて何やらぼそぼそと話しかけているようだった。

「……………何話してるんです、」

気にせず其のまま駅へ向かうべきだと判つてはいるものの、どうしても気になってしまい、結局前を向いたまま問いかける。

「悪口なんて言つてないよ」

「信用できません」

「酷い言い草。折角の一番に選ばせてあげようねって言つたのに」
わーゴウト、と肩に乗せた黒猫に話しかける思わせ振りの態度が実に癪に障った。だが、其の科白には興味を引かれ、足取りがほんの少しだけ乱れてしまつた。

其れを目にしたのであるうづ付けが、彼の肩口で密やかに笑つた気配を感じた。

ばれてしまつては仕方が無い。

汗闊な自分に内心舌打ちしつつ足を止め、後ろを振り返れば、自分たちの遣り取りなど感知し得な

「彼は突然の動きに驚いたのか。うお危ね」と悲鳴を上げて踏鞴を踏み、ずり落ちかけた黒猫の身体を慌てて支えた。

「突然止まるなよなあ、こっちは荷物二つも持つてるんだから」

荷物の一つに数え上げられた黒猫は流石に不快に思ったのか。それまで力無く垂らしたままだった其の長い尾で、彼の頬をぺちりと軽く打った。

「いてて、と咳きながら打たれた箇所を擦っている彼を見ながら、黒猫の不興を蒙ってそれだけで済んだのなら重畳だ、と場違いな感想が脳裏を過ぎる。若し先の発言をしたのが自分であつたなら、間違ひなく流血沙汰となつていただろう。」

此の目付けは「こが指導下にある者に対しては、矢鱈と礼儀に煩ひのだ。」

「選ぶつて、何をです、」

苦情を聞き流して問いかければ、彼は気にした様子も見せず「こりと笑いながら抱えた荷物を互いの目の前にかざした。」

「春の新作を一通り。ライドウちゃん好きでしょ、こついつの」

何時もの釘善でも良かったのかもしれないけど。ま、偶にはね。

そう言つて微笑む彼を前に目を見張つた。

自分の好物を買い求める為に、彼は、態々こんなところにまで足を運んだといつのか。

純粋な喜びが胸を満たすも、つい先程まで怒つていた手前、どついつた態度に出るべきか一瞬迷つた。しかし即座に、先の失態も含めて礼のひとつも口に出れないようでは話にならないと思ひ直し、

学帽の影に染まる頬を隠しながら礼を述べた。

「……でも誤魔化されませんからね。本当にもつ止めてください、じつじつの」

「はいはい」

照れ臭さから素直でない科臼を付け足した自分を見て、仕方ないな、と言つて笑つ彼から視線を逸らした。すっかり機嫌が直つてしまつてはいたものの、しかし此処で其れを表に出すのも抵抗を覚えるので、せめて駅まではと機嫌の悪い素振りを保ち続ける。

だが、後方に居る大人たちには、そんな自分の考えなどすっかりお見通しらしい。

意地を張る自分を刺激しないよう一定の距離を保ちつつ、自分の後ろについて歩む彼らの密やかな笑い声が耳を打った。

すっかり手玉に取られていている自身を自覚するが、しかし悪い気はしなかつた。寧ろ何とも言えず妙にくすぐったい想いのみが胸中を満たす。

不思議な気分だ、と思いつつ足を動かす傍ら、脳裏の片隅で思つことは、次の登校の際にどんな言葉かけられるのかということ。

まずは、彼が自分の保護者だということから説明を始めなければならなさそうだ。

今は自分の後ろを歩む、実年齢より遥かに年若く見える彼の姿を思い浮かべ、しかしこれはなかなか骨が折れそうだと思ひ悩んだ。

根掘り葉掘り訊かれたとして、果たしてこの口下手な自分に彼らを誤魔化しきることが出来るかどうか。ライドウたる者が情けない、などと罵られるかもしれないが、正直言つて自信が無かつた。

矢張り何時ものように相手が勝手に想像を巡らせるまで待つしかないか。

ひとつひとつ地道に否定していけば何とかなるだろう。危険の高すぎる手ではあるが、自ら捻り出した言い訳を口にするより、遥かにましなように思えた。

考えることに夢中になるあまり、すっかり陰の消えてしまっている顔を晒し、呑気に後をついてくる彼の気配を確認しながら歩み続ける。それにしても。

それにしても、まさか斯様なことで頭を悩ませる事態が待ち受けていようとは。

帝都へ出て、多くの人々と関わるようになつて以来頓に増えた、里に居た頃には想像もできなかった類の煩わしさの数々に立て続けに溜息が漏れた。

【了】

・狐 尾を濡らす…

不用意に勇んで進んでも成功しないこと、或いは、物事の初めは易しいが、終わりが難しいこと。

〔参考文献〕

高木彬光著「我が一高時代の犯罪」